



天気占い



川崎ゆきお

急に強い風が吹き、黒い雲が増えている。動いているように見える。雨が降り出すのだろうか

。老婆が空を見ている。じっと見ている。場所は見晴らしのいい高台。下は住宅地が続いている。上は公園だ。崖と公園の隙間の小道は散歩コースとして人気がある。

「何を見ているのですか」散歩人が老婆に声をかける。

老婆は耳が遠いのか、それとも空に注目し、問いかけ声など上の空なのかもしれない。

「ああ」

やっと気付いたようだ。

「雨が降りそうですねえ。黒い雲が来てますよ」散歩人が老婆が気にしているだろうと思うことを先に言う。

「そうですねえ。雨が降るかもしれませんがなあ」

散歩人はそこで会話というより挨拶を終え、歩き出そうとしたが、老婆はずっと上空を見ている。それで少し気になった。

「何か見えますか」

「運勢がな」

「はあ」

散歩人にとっては予想外の返事だった。

「このような黒雲が沸くのは二週間ぶりじゃな。その日は雨になったが、今回はどうかのう」

「天気予報ですか」

「天を読んでおる」

「はあ」

「こういう日は身も心も不安定。思わぬことをしでかすもの。ご用心を」

「あ、はい」

それだけ言うと、老婆は歩き出した。散歩人とは逆方向へ。

「あのう」

老婆の背中に声をかけるが、反応がない。

「あのう、もしもし」

少し音量を上げたので、老婆は振り返った。

「占い師ですか？」

「まあ、そんなものじゃ」

「天気占いのようなものですか」

「それを天気予報と言いますがな」

「そうなんです、雲を見ての占いがあるのかなあと思ひまして」

「雲はのう。近いのじゃよ。人に」

「はい」

「星よりも近い」

「そうですねえ」

「お日様よりも近い」

「はい」

「お月様よりも近い」

「はい」

「人に近い。それだけに人への影響も強い」

「それをどうやって占うのですか」

「私は人を見て占う。だから、空は直接関係はない」

「人って、つまり人相や手相ですか」

「そんなものは何でもいい」

「あ、はい」

「ただ、空模様が参考になる。空を参考に、その人の気運を言ってやるのよ」

「間接的ですねえ」

「今の空模様と、その人とは関係はない。ただ、心に起こりやすい気運が乗り移る」

「はい」

「だから、毎朝空を見て、参考にする。まあ、日課じゃ」

「そうなんですか、よく見かけるので、声をかけてみました」

老婆は軽くお辞儀をし、立ち去った。

散歩人は好奇心に駆られ、そっと後を付けた。

すると、高層マンションに入っていった。

散歩人は不審がった。あの老婆は何階に住んでいるのかは分からないが、上の階まで行けば、この町で一番の見晴らしになる。空を見るのなら、高台の小道へ行く必要はないはず。

その後、散歩人は色々と調べたが、この町で占いを営んでいる人も場所もなかった。

散歩人はその翌朝、あの場所まで行くと、老婆がいる。そして空を見ている。

今度は声をかけなかった。

了